BY THE SEA
for the sea side life

文◎ジョージ・カックル
text by George Cockle

# Yesterday, Today and Tomorrow

毎年夏が巡ってくるとセシリオ・アンド・カポノの音を聴きたくなる。僕のラジオ番組でも夏の気配を感じるにつれ、彼らのリクエストが増えてくる。２本のアコースティック・ギターと、完璧で繊細なヴォーカル・ハーモニー。ハーモニーが似ているからか、よくクロズビー・スティルス・アンド・ナッシュと一緒にされるが、彼らと違うのはリゾートが似合うラブソングを歌っているところ。そしてハワイのスピリットを感じさせるニュアンスだと思う。マナというのかな？　ウクレレもスチールギターも入っていないのに、なぜか彼らの音はハワイを感じさせてくれる。海が好きな人にファンが多いのはそのせいだろう。

70年代のハワイは新しいハワイアンポップスの時代だった。そのレールを敷いたのが、セシリオ・アンド・カポノだといっても過言ではない。1973年にはめきめきと人気が出てきた彼らは、ワイキキのレインボウ・ビラというライブ会場で一週間に６回のライブを８ヶ月間続けて行い、すべてソールドアウト。その実績を買われて、アメリカ本土のコロンビアというメジャーのレーベルと契約をし、３枚のアルバムを発売した。そのとき僕が笑ってしまったのは、１枚目のアルバム『セシリオ・アンド・カポノ』のジャケットだ。なぜか彼らがアロハシャツの柄になっていて、ポケットとシャツの生地が柄合わせになっていない。ハワイの人だったら誰でもわかるはずなのに、やはり本土の人達にとってはハワイは遠い場所なんだろうね。

セシリオ・アンド・カポノはハワイだけではなく、アメリカの本土や日本まで人気がある。日本にもファンが多いから、彼らは夏が近づくとライブをしにやってくる。何年か前には、彼らは湘南の江ノ島の頂上にある灯台の下でライブをやったこともあった。じりじりと太陽が江ノ島を焼きつける真夏の暑い日、風も吹いてくれなかった。でもその熱さの下で、彼らのライブはそれ以上に熱く盛り上がり、夕日とともに、フェードアウトしていった。いつもライブは二人だけ、でも二人だとは信じられないほど熱い音を出す。繊細なハーモニーなのに、音は太い。ギターの音もリズムも音程もぴったりと合っているから、音が太くでる。ふたりだけで、ここまで出せるのかと思うほどだ。また

デビュー以来、彼らの音楽はあまり変わっていない。その分、彼らのライブは安心感がある。長年活動しているアーティストはよく曲がわからないほど、メロディや歌い方を変えてしまうが、彼らは違う。昔のまま、そしてアルバムそのままにやってくれるのが嬉しい。

僕が一番好きな曲は「セーリン」かもしれない。ラブソングが多いなか、これは船乗りがヨットで旅をしている歌だ。船に乗って自由に生きていきたい、そんな思いを歌っている。この曲を聴くと、ヨットに乗るのが好きだった父親を思い出す。よく船で南の島へ行きたいと言っていたから。

セシリオ・アンド・カポノの音楽はまさに、アイランド・リゾート・ミュージック。ハワイに運んでくれるセールボートかもしれない。

セシリオ・アンド・カポノ
『Cecilio & Kapono』

セシリオ・アンド・カポノ
『Night Music』

PROFILE
ジョージ・カックル
1956年鎌倉生まれ。日本人で日本舞踊の師匠の母とアメリカ人でヨットマンの父を持ち幼少時代を日本・テキサス・韓国で過ごす。小学3年生でビートルズに開眼。LAで有名なサーフポイントでの初サーフィン体験。この原体験が彼のその後の人生を決定付ける。日本での学生生活の後、憧れのインドをはじめ世界を放浪し、ハワイ経由でサンフランシスコに移り住み18年間波乗りに明け暮れた。1995年帰国後、生まれ故郷鎌倉へ音楽マネージメント＆制作会社を立ち上げ、日本のミュージックシーンにbabamaniaなどを輩出。音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家(マッドカプセルマーケッツ、阿川泰子など)として、2006年の8月には子供の英語・音楽教育用の本『ウクレレ・マミー・アンド・ミー』を出版。古今東西の音楽と文化と人間臭さをこよなく愛し日本と世界を結ぶ架け橋になりたいと願い、今日もボブ・マーリーを聞きながらサーファーとしても多忙な日々を送っている。

©George Cockle / Home & Decor By THE SEA